忘却の幸せ

午前六時。いつも通りの時間に目が覚めた。

頭がずきずきと痛むが、それもいつものことだ。朝はいつも気分が悪い。

そして、ここ一年ほど夢見がよくなくて、よく眠ることが出来なくて、睡眠薬にお世話になっている。

だるさを訴える身体を無理矢理起こし、俺はふらふらとキッチンへ向かった。

蛇口をひねり、二つのコップに水を汲む。一つは自分で飲むために。もう一つは花に水を遣るために。

それが済んだら、次は朝食の準備だ。目玉焼きとトーストを二つずつ作って二つの皿にのせる。レタスを洗い適当に千切ってボウルに盛り付ける。これで食事の準備は終わりだ。

テーブルにそれらを置いて、自分も座り、手を合わせて「いただきます」。いつも通りの食事風景だ。

一口食べてその出来に笑いがこぼれる。シンプルながら美味しくできている。最初は焦がしまくってとても食べられたものじゃなかったのに、よくここまで成長できたものだ。

食べ終わったらボウルと二つの皿を洗う。食洗器はこの家にはない。理由は単純なもので、お金がないからだ。

洗っている途中で今日がゴミ収集の日だったと言うことに気が付いた。我が家は、他のゴミはそんなに出ないのに、生ゴミは沢山出る。なぜだろう。一人暮らしなのに。

洗い終わって時計を見てみると、もう出勤時間が近くなっていた。悠長ゴミを捨てている時間はない。ゴミを捨てたらそのまま出なければ。これもいつも通りだ。少しは早くできたらいいのだが、いつもこうなってしまう。もう仕方がないと半ば諦めている。

鞄を持ち、ゴミ袋も持ち玄関のドアを開ける。なんとなく振り向き、いつもと変わらない部屋の光景に安堵し、ドアを閉めた。

俺は毎日、自分の部屋のある七階から一階まで階段を使って降りる。一年ほど前に、運動不足だと言われ、エレベーターを使わないようにし始めたのだ。そういえば誰に言われたんだったか。まあ、いいか。

ゴミ捨て場に到着したところで、隣の部屋に住む、友人の柚月（ゆづき）と会った。彼女もゴミを捨てるところだったらしく、こちらに気付いておはようと笑いかけてきた。

彼女は五年ほど前、まだ大学生だった頃に出会った。どうしてだったかは忘れた。

彼女と少し世間話などをした。生ゴミが多く出るのだと言うと変な顔をされたがどうしたのだろうか。

ゴミを捨て、会社に向かった。彼女と話してしまったことが響き、出勤したのは遅刻寸前の時間だった。

会社は貿易系で、俺も、年に何度も海外へ行く。そのため、誰かと付き合うとかそういうことには向いておらず、彼女いない歴イコール年齢の記録が毎年更新されている。

次の出張先のことを上司から聞いて、書類を作ったり、商品についての書類を作ったり、報告書を書いたりして今日は終わった。つまり、今日は書類仕事で殆ど終わっ

たのだ。
　ずっと同じ体勢をしていたからだろう。体を伸ばすと、ばきりぼきりと普通はありえないような音が、自分の体から鳴った。俺の体は大丈夫なのだろうか。
　晩ご飯を作るために、家の近くのスーパーによってから帰った。今日の献立はごはんと味噌汁、そして肉じゃがだ。俺が一番好きな料理、肉じゃが。小さい頃はそんなに好きでもなかったのに、大学生くらいから急に好きになった。何がきっかけだったっけ。
　アパートの前でまた柚月と会った。彼女も仕事から帰ったところだったようだ。そして、あちらも晩ご飯を作るためであろう。俺が行ったのとは違うスーパーの袋が腕にぶら下がっていた。
　彼女と、朝と同じように世間話をしながら、七階まで上がり部屋に入った。そう言えば彼女はさっき、なんだか思いつめたような顔をしていたが、何かあったのだろうか。
　そんなことを考えながら晩ご飯の支度をしていると、かた、と言う音が響いた。郵便受けに何か入ったような音だった。こんな時間になんだろうと思い郵便受けを覗いてみると封筒が一つ、入っていた。
　取り出してみると、達筆な字体――見覚えのない筆跡だ――で俺の名前が書いていた。住所もこの部屋のものだ。しかし消印はない。直接投函されたらしい。
　訝しく思いながら、封筒を破ると、中には特になんてことはない手紙が入っていた。このご時世に手紙と言うのは珍しいかもしれないが、この場合は封筒に手紙が入っていたということが普通ということだ。
　俺は、それを机に置き、先に途中だった晩ご飯の支度を済ませた。
　机に出来上がったおかずたちを置いていく。今日もきっちり二人分だ。
　食べる前に手紙を読もうと思い、開ける。中身は封筒と同じ筆跡で俺の名前があり、本文があった。

〇〇君
手紙を書くなら、ちゃんとマナーに則った方がいいのかな、と思うのだけど今回は許してね。まあ、多分これが最後になっちゃうんだけど。

　字体と文の雰囲気があっていなくて数秒面食らった。そして戸惑った。誰なんだろう、これを書いたのは。そして、これで最後になるとは一体どういう意味なのだろうか。
　俺は戸惑いつつ続きを読んだ。

私は大学生のときあなたと出逢って、今まで、すごく楽しかったし幸せだった。肉じゃが、私が好きだからって無理して食べて、でも美味しいって笑ってくれてたりしたよね。ありがとう。

　確かに昔は肉じゃがが好きではなかった。大学生頃から急に好きになった。理由は――覚えていない。
　震えながらも手は手紙を掴んでいて、目は続きを追っていた。

あ、柚月とも私が引き合わせたんだっけ。二人の方がいい感じで、ちょっと嫉妬しちゃった。

どういうことだろう。この文の感じだと、俺とこの手紙を書いた人は付き合っているようだ。俺に恋人がいたことはないはずなのに。

そんなことを考えていた俺は次の文章を読んで固まった。

それで、今回はお別れを言おうと思ったの。

お別れ。

ああ、俺はこの人に振られたんだな。付き合っていた記憶もないのに、なぜだか悲しかった。

私はすごくあなたのことが好きだよ。だけど、あなたは嫌だろうと思うの。こんな私は。他の人の子を身ごもって、それで、堕胎する勇気もない私なんか。

また、固まった。は？　他の人の子を身ごもった？　浮気したということだろうか。それにしては堕胎するというのは微妙におかしい気がする。と言うことは……

俺は一つの考えに辿り着いたが、俺はその考えに蓋をした。そんなわけがない。そんなことはあるはずがないと。

そんな俺を置いて無情にも手紙は続いていく。

あなたは出張から帰ってきたら驚くと思う。私が死んだって聞かされるんだもの。もしかしたら、落ち込むのかな。そうだったら、不謹慎だけど嬉しいな。思ってもらえてたってことだもん。

手紙はまだ続いていた。

この手紙は柚月に預けようと思います。一年後に、あなたに渡すように言っておくね。あ、でもゆーちゃんは鈍いから、もしかしたら気付くかもしれないな。よし、あの子にも手紙を添えてポストに投函しておこう。

そうか、と思った。手紙を郵便受けにいれたのは柚月だったのか。封筒に開けられた感じはなかったから、ずっと保管していただけなのだろう。生真面目なやつだな。

じゃあ、そろそろ終わるね。あ、ゴミの日は△曜日と×曜日です。忘れないでね。じゃあね。さよなら。愛してた。

名前は無かった。ただ、よくわからない、かろうじて生物だと分かるものが描かれていた。

それを見た途端。俺の中に何かが湧きあがった。

そうだ、この絵は彼女が描いたものだ。

彼女とは大学生の時に出会った。学部が一緒で、選択していた外国語も一緒だったのだ。付き合って二年目に同棲を始め、その一年後にプロポーズした。そして彼女は頷いてくれて、そして――

死んだ。

出張から帰ってきた俺は、部屋に入ろうとして柚月に呼び止められた。そして柚月の口から出てきたのは、恋人の死の知らせだった。

どうして死んでからすぐに俺の所へ知らせが来なかったのかと言うと、それは、まだ彼女と籍を入れていなかったからである。まだ、同棲していた恋人。そんな扱いだった。それに、彼女が死んだときは仕事が忙しかったのだ。どちらにせよ電話を取ることはなかっただろう。

しかし、柚月の話でさらに驚いたのは、彼女がレイプされたということと、その上彼女に子供が出来てしまったのだということだった。

最初、俺は悲しみから後を追おうとした。しかし柚月が引き留めたのだ。柚月は、俺を殴り、そんなことしてもあいつはかえってこないし喜ばない。仮にかえってきたとして、あんたが死んでちゃ意味ないでしょう、と若干矛盾したことをまくし立てた。

俺は彼女がいない世界で生きていられるとは思えなかった。しかし、柚月は生きろという、それで、俺は……あれ？　俺はその辺りから彼女を想った記憶がない。それはつまり、俺が彼女を忘れたということだ。

不甲斐ない。助けられなかっただけでなく、あまつさえそれを、あの人が死んだこと自体を、いや、あの人がいたことすらを忘れて、自分を守ったのだ。

スッと、色の付いていた世界――もともとそれは偽りの色だったのだが――が色を失っていく。まるで、薄い膜でも張ったように、輪郭がぼやけて俺と隔たっていく。

彼女がいない世界に何の意味があるのだろうか。この世界に自分がいて、何ができようか。

ぼんやりと部屋を見渡した。目の端に一つの瓶が映る。中身はよく知っているものだ。ここ一年、ずっと使っていたものだから。ああ、そうだ。眠れなかったのは忘れてしまっていたせいなのかもしれない。

迷わずに瓶を手に取る。医師にこれ以上は飲んではいけないと言われた量を優に超える、いや、瓶の中に入っているすべてのそれを一気に口の中に入れる。吐き気がしてきた。胃から、何かがせり上がってくる。ごほごほと咽るが、それを吐き出さないように口を押える。喉に詰まった感覚がした。むせそうになるのを必死でこらえる。呼吸が苦しくなり、意識が遠のいていく。唇が笑みの形を描くのが分かった。これで彼女の元へいける。

彼の目から光が消えた。花瓶に活けられてた花がはらりと散った。

鞄の中で形態が弱弱しい光をたたえながら振動した。十秒ほど震えて、パタリと止まった。しかし、数秒間を置いてまた震え出す。それは、それから三回繰り返された。

「自殺でしょうね」

まだ若い刑事が言った。

部屋は綺麗で、争った跡もない。ただ、嘔吐の後の独特の気持ち悪い臭いがした。

「そうだろうな。で、死因は？」

「原因は睡眠薬の過剰摂取で、死因としては、吐瀉物が喉に詰まったことによる窒息死です。」
「そうか」
遺書はないから、突発的な自殺だったと見られる。
それは、彼が握っていた手紙、そこに書かれていたことが、裏付けている。これを裏付けとして取れるのかと言うと弱くはないが強くもない。が、心象としては自殺もしたくなるだろうというものだった。
「一年前に死んだ恋人の後を追って、ね」
違和感がある。なぜ死んだ後すぐに追わなかったのだろうか。そして、手紙が一年後と指定していたのも気になる。どうしてわざわざ一年後を指定したのか。謎は多い。
「センパイ、第一発見者の方をお連れしました」
それから、第一発見者だという隣の部屋の人間の話を聞いた。それによると、彼は恋人が死んだという事実が受け入れられず、恋人がいたということを忘れてしまったのだという。手紙を郵便受けに入れたのは自分で、それは死ぬ前に恋人が頼んだのだとか。自分が死んでから丁度一年後に彼に渡してほしいと。恋人の女性の自殺を止めなかったのかと訊くと、彼女は手紙が郵便受けに入れられて、自分が気付く前に飛び降りたのだと言った。
友人は、生きているのか訊きたくなるくらい顔から血の気が失せて、絶望の色を乗せている。自分が渡した手紙で彼の平穏が失せて、自殺してしまったのだから。きっと、自分が殺したのだと責めているのだろう。自分たちはそれに対して、そんなことはありませんよとか月並みなことしか言えない。
友人は最後に顔をくしゃりと歪めさせて言った。
「あの子が死んだ日は、二人が付き合い始めた記念日だったんですよ。プロポーズもその日。なんだってわざわざその日を選んだんだか」
何となく、解けたような気がした。恋人は、二人の記念日をわざわざ選ぶことで彼の記憶に自分という存在を強く焼き付けさせようと思ったのだ。そうすれば、彼はずっと自分のもので、自分もずっと彼の傍にいられるから。だから、わざわざ友人に頼んだのかもしれない。自分が感じた印象だが、彼女は彼に気があるようだった。だから、牽制の意味も含めて。
そうだとしたら、なんと性格の悪い女なのだろうか。いや、死んだ人間を悪く言ってはいけないから、一途だとでも言おうか。同じ女としてはそうしたい気持ちも分からないではないが、普通そこまでするか、と恋人の行動力に舌を巻いた。まあ、彼女も、彼が後追いするとまでは思っていなかったのかもしれないが。
しかし、この部屋というか、彼が死んでいる机の辺りを見ると何とも言えない気持ちになる。食事の準備をして、食べる前に手紙を読んで、そして死んだ。
それは、普通だったら何とも思わないのだが、
「でも、何だか幸せそうですね」
ああ、そうだな。彼は笑っているし、それに――
「食卓が、夫婦そろっての食事って感じですから」
そうなのだ。机には、二つのごはんに、二つの味噌汁、そして二つの肉じゃがの食器がそれぞれ並べられていたのだ。それこそまるで夫婦でこれから食事をするかのように。

死んだ彼は、一年前まで恋人と同棲していたという話だし、その癖が残って……いや、もしかしたら無意識に取り戻そうとしていたのかもしれない。恋人を。恋人がいるという日常を。もしそうなのだとしたら、なんと滑稽で、なんと哀しい話なのだろう。

「センパイ、僕書類処理とかいろいろしないといけないから戻りますね」

そう言うと、部下はさっさと部屋を出て行った。後には、私と死んだ彼の友人が残った。

「死のうと思ってる？」

そう訊くと、ゆるゆると首が振られた。

「私が死んだら、悲しむ人がいると思うんです。今の私のように自分を責める人もいるかもしれない。だから」

死のうとはおもいません、と最後は力強さを感じさせる声で彼女は言った。

「そうか。うん、安心したよ。死ぬんじゃないかと心配していたからね。じゃあ、今日はもう帰っていいよ」

そう言うと彼女は笑って頷いた。

「心配してくれてありがとうございます。それじゃ」

彼女は、部屋から出て行った。

私は、ひとつ、考えていた。彼が恋人を忘れたことには、何か意味があったのではないかと。友人に生きろと言われたから？　後追い自殺までしたのだから、ただの友人に言われただけではそこまでしないと思う。だとすると彼は――

「それ以上は言わぬが花ってやつだな。それに、言ってももう意味はないし」

それにもし仮に私の想像通りだとすると、彼の行動がよく分からなくなってくるのだ。

まったく、こんなことを考えるなんて、私は実は野次馬の性質でもあるのだろうか。

「さて、私も署に戻るとするか」

最後に部屋を一度眺めて、ドアを閉める。

ガタン、と、重くて空虚な音が響いた。